

論文

大学教育における「楽しむ力」：実践編¹

”The Power to Enjoy” in University Education: Practical Application

小森三恵* 宮原道子** 坪根由香里*** 佐久間留理子****

KOMORI Mie, MIYAHARA Michiko, TSUBONE Yukari, SAKUMA Ruriko

The mission of Osaka University of Tourism is to foster global citizens and professionals with “the power to enjoy” tourism and life. To visualize this concept as a learning outcome, three studies analyzed student self-assessment data. Research 1 tracked changes in “the power to enjoy” among 2024 entrants and examined links to academic performance. Research 2 tested the assessment scale’s validity and reliability through its relationships with self-esteem and resilience. Research 3 described classroom practices using the concept and the university’s Can-do/Can-enjoy List. Findings across the three studies suggest that “the power to enjoy” is an effective concept for comprehensively assessing learning quality in university education. Its usefulness as an educational evaluation indicator that complements traditional measures of academic achievement has been empirically supported.

キーワード：楽しむ力 (the power to enjoy)、学修成果の可視化 (visualization of learning outcomes)、自己評価 (self-assessment)

1. はじめに

大阪観光大学では「自由を共に楽しみ、社会を共に生きる」という教育理念のもとに、観光ひいては人生を「楽しむ力」を備えた世界市民と職業人を養成することを目標としている (大阪観光大学, 2022; 2024)。本学では 2024 年に楽しむ力研究会を発足させ、そのワーキンググループである新大学教育論チームにおいて「楽しむ力」をどのように捉え可視化するかについて検討を重ねてきた。本稿では、「大学教育における『楽しむ力』：理念編」に続き、本学における「楽しむ力」の評価の取り組みについて、これまでの成果を報告する。

本学では、偏差値や学力テストでは測定できない社会的・感性的な能力を「楽しむ力」と表現している。類似する概念としては、経済協力開発機構 (OECD) による「社会情動的スキル (social and emotional skills)」がある。OECD (2024) は社会情動的スキルを、健康と幸福、学業成績、職務の遂行能力といった人生の重要な成果を支える能力であると定義し、自制心やストレス耐性、協調性、社交性、好奇心などのスキルを例示している。本学では大学教育で育むべき「楽しむ力」には、目標に向かう主体的な態度や、自分自身に対するポジティブな感情、誰かと「共に」楽しむ感性、自分の人生を生きぬく力などが含まれている (詳細については「大学教育における『楽しむ力』：理念編」を参照されたい)。

本稿では、これらの「楽しむ力」を学修成果指標として可視化することを目的とし、学生による自己点検評価データを収集し分析を行う。調査 1 では、2024 年度入学生の自己点検評価における「楽しむ力」の経時的変化を観察し、学業成績との関連性を検討する。次に、調査 2 では、「楽しむ力」評価尺度の構成概念や妥当性について、自己肯定感やレジリエンスとの関連性を検証する。さらに調査 3 では、「楽しむ力」および本学ディプロマポリシーに基づく学修目標である「大阪観光大学 Can-do/Can-enjoy リスト」を用いた授業での実践について報告する。本研究の成果は、本学学生の現状を把握するとともに、「楽しむ力」を核とした先進的かつ独自の教育カリキュラムの開発に寄与すると期待される。

¹ 本研究結果の一部は大阪観光大学教育シンポジウム「楽しむ力と教育変革—新観光学の示すもの—」(2025 年 9 月 27 日)において報告された。

2. 調査 1

(1) 目的

調査 1 では、観光学部新生を対象に「楽しむ力」の自己点検評価データを収集し、学力テストなどの評価指標では測定困難な社会的・感性的スキルの現状を把握することを目的とする。入学時・1 年次前期終了時、1 年次後期終了時の 3 期において「楽しむ力」を測定し、学生の自己評価の経時的変化を観察する。また、「楽しむ力」と学業成績の関連性についても検討を加える。

(2) 方法

1) 調査対象

調査対象は大阪観光大学観光学部の 2024 年度 4 月入学生のうち 1 年次後期に在籍していた 185 名であった。そのうち日本人学生は 39 名、外国人留学生は 146 名であった。後述の各調査時期の有効回答数は、1 期 118 名、2 期 113 名、3 期 72 名であった。

2) 調査時期

調査は以下の 3 期において実施された。

1 期 (入学時) : 2024 年 4 月

2 期 (1 年次前期末) : 2024 年 7 月

3 期 (1 年次後期末) : 2025 年 1 月

3) 調査方法及び調査項目

調査は 1 年次ゼミ科目である「基礎演習」(1 期・2 期)と「調査研究 1」(3 期)の授業内にて、学びの自己点検のための課題として実施された。いずれも Google Forms によるオンライン調査であった。

表-1 「楽しむ力」評価のポイント

ターゲット	評価のポイント
鑑賞を楽しむ力	(1) なにごとも好奇心をもって観察し、その意味や重要性に注意を向けることができる (2) 豊かな感性をもってものごとを受けとめることができる (3) ものごとを多面的に観察し、批判的思考をもってその本質をとらえることができる
創造を楽しむ力	(4) 自分らしいやりかたを探求し試行錯誤しながら課題に取り組むことができる (5) 決めたことを最後まであきらめずに目標を達成することができる (6) 新しいことや難しいことに挑戦し、自分や社会にとっての価値を生み出すことができる
交流を楽しむ力	(7) 自分と他者との意見や立場の違いをポジティブに受けとめ、問題解決に向けて協働することができる (8) 自分の考えや感情を適切に表現し、他者に共感してもらうことができる (9) 他者の考えや感情を理解し、共感しようとするすることができる
人生を楽しむ力	(10) ものごとの明るい面や良い面に気がつくことができる (11) 失敗したときや不安があるときでも、めげずにそのときやるべきことをやれる (12) 自分の人生を自分で決めているという感覚を持つことができる

調査項目は、大阪観光大学にて作成された「楽しむ力」評価のポイント (表-1) を尺度として使用した。これは「非日常空間への移動を伴う自由な鑑賞・創造・交流活動」(山田, 2021) という観光の定義に基づき、本学学生が身に着けるべき社会情動的な態度・スキルを選定したものである。鑑賞を楽しむ力・創造を楽しむ力・交

流を楽しむ力・人生を楽しむ力の 4 要素につき各 3 項目、合計 12 項目で構成されている。回答は、「1 点：まったくできていない」「2 点：ほとんどできていない」「3 点：どちらかといえばできていない」「4 点：どちらともいえない」「5 点：どちらかといえばできている」「6 点：だいたいできている」「7 点：いつもできている」の 7 件法であった。

また、学修成果の指標として学生による間接評価である「楽しむ力」得点と、教員による直接評価である学業成績との関連性を検討するため、2024 年度前期、後期、および 1 年間の累積 GPA を分析に用いた。

(3) 結果と考察

1～3 期における学生による「楽しむ力」自己点検評価について、回答者全体の平均値と標準偏差を求めた (表-2)。いずれの時期においても各得点の平均は中点 (4 点) を超えており、全体的に見ると、本学 1 年生による「楽しむ力」の自己評価は高いことがうかがえる。

次に「楽しむ力」評価の経時変化を観察するため、合計得点において調査時期を参加者間要因とした分散分析を行った。その結果、調査時期の主効果が有意であった [$F(2, 300) = 5.56, p < .01, \eta^2 = .036$]。Holm 法による多重比較を行ったところ、1 期～2 期間にのみ合計得点の有意差が認められた ($p < .01$)。つまり、学生による自己評価は入学時よりも前期終了時に高まり、その評価は学年末にも一定程度維持されていることが示された。

さらに、学生による「楽しむ力」の自己点検評価と教員による成績評価の関連性を検討するため、各調査時期の「楽しむ力」合計得点と GPA との相関係数を求めた (表-3)。無相関の検定の結果、1 年次前期末の「楽しむ力」自己評価と同時期の GPA ($p < .01$) および年間の累積 GPA ($p < .05$) に有意な正の相関が認められた。つまり、入学後半年時点での「楽しむ力」の自己評価が高いほど学業成績も高いことが示された。

これらの調査 1 の結果から、本学観光学部 1 年生の「楽しむ力」自己評価は、入学時から全体的に高得点であったが、1 年次前期のカリキュラムを経てさらに上昇、1 年次後期末まである程度維持されたことが明らかになった。さらに、1 年次前期末の「楽しむ力」自己評価と学業成績との相関が認められた。入学時における「楽しむ力」評価の高さは、本学の教育理念やアドミッションポリシーにおいて表現されている学生像とのマッチングがおおむね良好であったことがうかがえる。さらに、前期の学修を通じ学生は、学力として測定される知識やアカデミックスキル以外の側面、つまり社会情緒的スキルや態度においても、自己の成長を感じ自己評価を高めたと考えられる。

学生による間接評価である「楽しむ力」と教員による直接評価である GPA の間の相関については、いくつかの観点から解釈できる。1 つは、1 年次前期の基礎的な専門知識やアカデミックスキルの習得において学修目標を達成した学生は、その成果をメタ認知的に把握し自己肯定感や自己効力感を高めており、その結果、これらの概念をターゲットとして含む「楽しむ力」の評価に反映される可能性である。もう 1 つは、教員による到達目標や成績評価基をどのように設定しているかという点である。「楽しむ力」評価のポイントは、2024 年度シラバス作成時の資料として教員に共有されているものの、到達目標や評価基準への採用について明確なガイドラインがあるわけではなく、本研究においても教員がどの程度「楽しむ力」を成績評価に組み込んでいるかについては調査していない。これらの学生と教員による学修成果指標間の相関については、さらなる検証が必要である。

表-2 各調査時期の「楽しむ力」尺度評価得点の平均値と標準偏差

	1 期 (1 年次 4 月) $N=118$		2 期 (1 年次 7 月) $N=113$		3 期 (1 年次 1 月) $N=72$	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
鑑賞	14.86	3.98	16.49	3.28	16.04	3.27
(1)	4.93	1.47	5.56	1.13	5.31	1.21
(2)	5.08	1.49	5.50	1.17	5.39	1.24
(3)	4.85	1.53	5.42	1.19	5.35	1.21
創造	15.36	3.98	16.72	3.16	16.26	3.18
(4)	4.98	1.52	5.52	1.23	5.38	1.26
(5)	5.28	1.54	5.67	1.13	5.51	1.26
(6)	5.09	1.46	5.52	1.20	5.38	1.16
交流	15.54	4.00	16.93	3.37	16.39	3.44
(7)	5.17	1.43	5.71	1.18	5.50	1.26
(8)	5.06	1.46	5.57	1.27	5.40	1.31
(9)	5.31	1.55	5.65	1.25	5.49	1.22
人生	15.81	4.01	17.09	3.36	16.65	3.25
(10)	5.34	1.45	5.73	1.26	5.64	1.12
(11)	5.08	1.51	5.55	1.23	5.40	1.33
(12)	5.40	1.63	5.81	1.22	5.61	1.19
合計	61.57	14.54	67.22	12.19	65.35	11.85

表-3 「楽しむ力」尺度評価得点と GPA との相関係数

	GPA	GPA	GPA	N
	1 年次前期	1 年次後期	1 年次累計	
楽しむ力 1 期 (1 年次 4 月)	.116	.063	.098	118
楽しむ力 2 期 (1 年次 7 月)	.289 **	.169 +	.237 *	113
楽しむ力 3 期 (1 年次 1 月)	.097	.075	.102	72

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3. 調査 2

(1) 目的

調査 2 は、「楽しむ力」評価尺度の構成概念や妥当性について、自己肯定感やレジリエンスとの関連性を検証することを目的とする。調査 1 の対象となった学生に対して、2 年次前期に測定された「楽しむ力」と自己肯定感、レジリエンスのデータの関係を分析する。

「大学教育における『楽しむ力』：理念編」より「楽しむ力」と自己肯定感は密接な関わりがあると考えられる。また、自己肯定感と密接に関わると予測される自尊心は、魚野・前野 (2021) よりレジリエンスとの関連が指摘されている。自尊心の高い人は、自分の能力の状態を受容するなどの内的安定度が高いとされる。小塩・中谷・金子・長峰 (2002) は、レジリエンスと自尊心とは正の相関を示し、自尊心が高い人はネガティブなライフイベントがあってもレジリエンスを高く保つとしている。

したがって、「楽しむ力」と自己肯定感およびレジリエンスの関係については、以下の 2 つの仮説が考えられる。

仮説 1 : 「楽しむ力」得点が高い学生ほど、自己肯定感が高い

仮説 2 : 「楽しむ力」得点が高い学生ほど、レジリエンスが高い

(2) 方法

1) 調査対象

調査対象は大阪観光大学観光学部 2024 年度 4 月入学生のうち、2 年次に在籍する 185 名であった。そのうち日本人学生は 39 名、外国人留学生は 146 名であった。有効回答数は「楽しむ力」調査 152 名、自己肯定感調査 149 名、レジリエンス調査 162 名であった。

2) 調査時期

「楽しむ力」と自己肯定感の測定は 2 年次 (2025 年) 5 月に、レジリエンスの測定は同 6 月に実施された。

3) 調査方法及び調査項目

2 つの調査は観光学部 2 年次必修科目である「心が動く仕組み」の授業内にて実施された。いずれの調査も Google Forms によるオンライン調査であった。

「楽しむ力」については調査 1 と同様に、12 の調査項目を使用し 7 件法で回答を求めた。

自己肯定感の調査項目は、築地・藤原・折口 (2021) で作成された自己肯定感尺度を使用した。この尺度は、3 因子 (「自己肯定」13 項目、「安定した自己・自信」10 項目、「自己決定・キャリア」5 項目) 28 項目で構成されている。長所だけでなく短所も含めて自己の存在を認める肯定的感情を測定していること、また、質問が比較的短く平易な文で記述されていることから、築地ら (2021) の尺度を選定した。各項目について、現在の自分自身についての考えやイメージにどの程度あてはまるかを「1 点: まったくあてはまらない」「2 点: あまりあてはまらない」「3 点: どちらともいえない」「4 点: ややあてはまる」「5 点: よくあてはまる」の 5 件法で評価するよう求めた。

レジリエンスの調査項目は、「大学生版日常生活レジリエンス尺度: Resilience Inventory for Daily Life of University Students (RIDLUS)」(八田・清水, 2014) を使用した。この RIDLUS は 5 因子 (友人資源 (CR)、家族資源 (FR)、新奇性追求 (NR)、肯定的な未来志向 (AFO)、感情調整 (EA)) 25 項目 (各 5 項目) で構成されている。RIDLUS の各項目は比較的平易で短い日本語で記述されているため、外国人留学生にも理解しやすいと考えられる。回答方法は、「最近 1 か月の生活を振り返りながら」という教示文の下、各項目について「1 点: とても当てはまらない」「2 点: 当てはまらない」「3 点: どちらでもない」「4 点: 当てはまる」「5 点: とても当てはまる」の 5 件法で評価してもらう形式であった。

RIDLUS の下位因子のうち、「友人資源 (CR)」および「家族資源 (FR)」は「大学生版ポジティブ・コーピング尺度: Positive Coping Scale for University Students (PCSUS)」(八田・清水, 2013) における「サポート希求コーピング」と弱一中程度の有意な正の相関が認められた (八田・清水, 2014)。また、「新奇性追求 (NR)」は、PCSUS の下位尺度である「挑戦的信念」と中程度の有意な正の相関があることが示された (八田・清水, 2014)。そして、「肯定的な未来志向 (AFO)」と「大学生版ライフスキル尺度: Life Skills Scale of University Students (LSSUS)」(八田・清水・大後, 2014) の「将来設計」(将来を具体的にイメージし設計していくスキル) との間には中程度の有意な正の相関が認められた (八田・清水, 2014)。また、「感情調整 (EA)」は、LSSUS の下位因子である「前向きな思考」(困難な状況下における楽観的・積極的態度) と中程度の有意な正の相関関係を示した。さらに、RIDLUS の各下位因子及び尺度全体と、LSSUS の下位因子である「自尊心」との間にも有意な正の相関が認められた (八田・清水, 2014)。したがって、「楽しむ力」評価尺度の基準関連性を検証することが可能と考えられる。

(3) 結果と考察

まず、4 期 (2 年次 5 月) における学生による「楽しむ力」自己点検評価について、回答者全体の平均値と標準偏差を求めた (表-4)。調査 1 と同様に、「楽しむ力」各得点の平均は中点 (4 点) を超えており、全体的に

見ると、本学 2 年生による「楽しむ力」の自己評価は高いことがうかがえる。

表-4 4 期の「楽しむ力」尺度評価得点の平均値と標準偏差

	4 期 (2 年次 5 月) $N=152$	
	平均値	標準偏差
鑑賞	15.16	2.95
(1)	4.96	1.33
(2)	5.25	1.32
(3)	4.95	1.17
創造	14.85	3.24
(4)	4.93	1.43
(5)	5.09	1.40
(6)	4.82	1.34
交流	15.24	3.36
(7)	5.01	1.45
(8)	4.96	1.40
(9)	5.27	1.29
人生	15.36	3.50
(10)	5.30	1.47
(11)	4.88	1.40
(12)	5.18	1.43
合計	60.62	10.58

次に、自己肯定感尺度 (築地・藤原・折口, 2021) の各尺度の平均値と標準偏差を表-5 に示した。いずれの因子得点も、中点 (自己肯定: 39 点、安定した自己・自身: 30 点、自己決定感: 15 点) よりも平均値が高い。この結果から全体的に見ると、本学 2 年生の持つ自己肯定感が高いことがうかがえる。

表-5 自己肯定感の尺度得点の平均値と標準偏差

	4 期 (2 年次 5 月) $N=149$	
	平均値	標準偏差
自己肯定	48.88	8.14
安定した自己・自信	33.85	6.15
自己決定感	19.10	3.34
合計	101.83	15.82

続いて、大学生版日常生活レジリエンス尺度 (八田・清水, 2014) 各尺度の平均値と標準偏差を表-6 に示した。いずれの因子得点も、中点 (15 点) よりも平均値は高い。この結果から全体的に見ると、本学 2 年生の持つレジリエンスは高いことがうかがえる。

最後に、「楽しむ力」評価尺度の構成概念や妥当性について、自己肯定感やレジリエンスとの関連性を検証するために、「楽しむ力」尺度得点、自己肯定感尺度得点、レジリエンス尺度得点の相関係数を算出して一覧にまとめた (表-7)。無相関の検定の結果、2 年次の「楽しむ力」尺度得点と合計得点と、自己肯定感尺度の尺度得点と合計得点、レジリエンスの尺度得点と合計得点との間には、有意な正の相関が得られた。ただし、「楽しむ力」尺度の「交流」とレジリエンス尺度の家族資源との間の相関係数の検定結果は、有意傾向であった。つまり、「楽しむ力」の自己評価が高い学生は、自己肯定感およびレジリエンスも高いことが示された。

以上の結果から、仮説の 1 と 2 の両方が支持されたといえる。したがって、開発された「楽しむ力」評価尺度は、一定水準の基準関連妥当性があると考えられる。

表-6 レジリエンスの尺度得点の平均値と標準偏差

	2 年次 6 月 $N=162$	
	平均値	標準偏差
友人資源	18.43	4.18
家族資源	18.44	4.46
新奇性追求	18.39	3.58
肯定的な未来	18.35	3.75
感情調整	17.13	3.40
合計	90.73	15.66

表-7 「楽しむ力」尺度得点、自己肯定感尺度得点、レジリエンス尺度得点の相関係数 ($N=123$)

		楽しむ力				合計
		鑑賞	創造	交流	人生	
自己肯定感	自己肯定	0.519 **	0.602 **	0.550 **	0.657 **	0.708 **
	安定した自己・自信	0.394 **	0.566 **	0.429 **	0.515 **	0.580 **
	自己決定・キャリア	0.571 **	0.614 **	0.495 **	0.645 **	0.706 **
	合計	0.543 **	0.660 **	0.555 **	0.676 **	0.741 **
レジリエンス	友人資源	0.273 **	0.416 **	0.217 *	0.325 **	0.374 **
	家族資源	0.250 **	0.422 **	0.170 +	0.386 **	0.375 **
	新奇性追求	0.461 **	0.416 **	0.178 *	0.445 **	0.454 **
	肯定的な未来志向	0.374 **	0.504 **	0.358 **	0.479 **	0.522 **
	感情調整	0.346 **	0.351 **	0.295 **	0.439 **	0.436 **
	合計	0.423 **	0.535 **	0.303 **	0.519 **	0.541 **

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4. 調査 3

(1) 目的

調査 3 では、観光学部新入生が、2025 年度前期の 1 年次ゼミ科目である「基礎演習」の授業において「大阪観光大学 Can-do/Can-enjoy リスト」から目標設定された項目について、授業後にどのような自己評価をしているかを明らかにすることを目的とする。

(2) 方法

1) 調査対象・調査時期

調査対象は大阪観光大学観光学部の 2025 年度 4 月入学生 214 名（日本人学生 54 名、外国人留学生 160 名）で、2025 年度前期に実施した。各回の有効回答数は表-8 に示した。

2) 調査方法

調査は、1 年次ゼミ科目である「基礎演習」の授業後の学修成果を自己点検する振り返り課題として、Google

Forms を用いて実施された。毎回、「大阪観光大学 Can-do/Can-enjoy リスト」から 3~4 項目を目標として授業開始時に提示し、授業後に各目標と授業全体の内容の理解度について、どの程度「達成できた」と感じるかを、「★まったくできなかった」「★★あまりできなかった」「★★★まあまあできた」「★★★★よくできた」の 4 点満点で評価することとした。授業の振り返りでは、「授業で学んだことや考えたこと、できるようになったこと」および「授業でわからなかったこと、できなかったこと、質問したいこと」についても記述したが、本調査では点数評価の項目のみを対象とする。

実施に際しては、自己評価の高い・低い成績に影響を与えることはないので、できたこと・できなかったことを「正確に」判断するよう指示している。また、回答データは、教育・研究上の目的に限定して活用され、個人データが公表されることはないことを説明し、同意を得たデータのみを使用している。

3) 結果と考察

各回の授業内容、Can-do/Can-enjoy リストを基に設定された目標、回答者数、および、平均値と標準偏差を表-8 に示す。2 回目から 5 回目の授業では、13 クラスを 4 つに分けて順に図書館ツアーを実施したため、それ以外の「大学での学び」「授業の受け方」「情報を伝える」と合わせて 4 種類の内容をそれぞれ扱った。また、「大学での学び」と「図書館ツアー」は同じ質問項目を 2 回の授業で使用したため、「224 名」は 2 回分の合計となっている。

表-8a 各回の授業内容、目標、回答者数、平均値および標準偏差

回	授業内容	目標 (Can-do/Can-enjoy リストより)	人数	平均値	標準偏差
1	イントロ ダクション	目的のために、多くの情報の中から必要な情報を選択することができた	172	3.35	0.77
		さまざまな活動に参加する前向きな気持ちを持つことができた	172	3.42	0.73
		難しいと思うことでも努力することを楽しむことができた	172	3.23	0.79
		本日の授業の内容を理解することができた	172	3.36	0.82
2 5	大学での 学び・ 図書館 ツアー	大学での学びを理解することができた	224	3.51	0.66
		課題についての適切な資料を探すことができた	224	3.46	0.67
		資料の中から必要な内容を探すことができた	224	3.46	0.68
		本日の授業の内容を理解することができた	224	3.63	0.54
2 5	授業の 受け方	課題を正しく理解することができた	119	3.39	0.73
		講義を聴いて内容を理解しようとすることができた	119	3.46	0.71
		ノートやコメントシートを書くことを、前向きな気持ちを持って取り組むことができた	119	3.34	0.77
		難しいと思うことでも努力することを楽しむことができた	119	3.44	0.70
		本日の授業全体の内容を理解することができた	119	3.34	0.77
2 5	情報を 伝える	目的のために、多くの情報の中から必要な情報を選択することができた	126	3.60	0.58
		読み手の理解を考えて、論理的な文章を書くことができた	126	3.48	0.68
		自分の意見を相手にわかりやすく伝えることで、ディスカッションを楽しむことができた	126	3.59	0.58
		自分と他者との意見や立場の違いをポジティブに受けとめ、問題解決に向けて協働することに楽しさを感じることができた	126	3.62	0.59
		本日の授業全体の内容を理解することができた	126	3.63	0.55

表-8b 各回の授業内容、目標、回答者数、平均値および標準偏差

回	授業内容	目標 (Can-do/Can-enjoy リストより)	人数	平均値	標準偏差
6	ほうれん そう	教職員やクラスメイトとの間で、必要な報告・連絡・相談ができた	133	3.66	0.55
		人との関わりを楽しむことができた	133	3.68	0.57
		読み手の理解を考えて、論理的な文章を書くことができた	133	3.60	0.61
		大学生としてのマナーを守り、適切にメールを書いて送信することができた	133	3.68	0.54
		本日の授業全体の内容を理解することができた	133	3.68	0.54
7	意見を 伝える	目的のために、多くの情報の中から必要な情報を選択することができた	121	3.59	0.60
		批判的思考をもって、ものごとの本質をとらえることを楽しむことができた	121	3.52	0.66
		人との関わりを楽しむことができた	121	3.57	0.68
		本日の授業全体の内容を理解することができた	121	3.60	0.63
8	グループ ワーク	目的のために、多くの情報の中から必要な情報を選択することができた	95	3.60	0.59
		批判的思考をもって、ものごとの本質をとらえることを楽しむことができた	95	3.49	0.65
		人との関わりを楽しむことができた	95	3.60	0.61
		本日の授業全体の内容を理解することができた	95	3.49	0.77
9	模擬店 企画	自分とは異なる国・地域の人々の考えや感情を理解し、共感しようとすることができた	95	3.72	0.50
		自分とは違う考え方であっても、他者の考えを尊重することができた	95	3.73	0.51
		人との関わりを楽しむことができた	95	3.67	0.55
		教職員やクラスメイトとの間で、必要な報告・連絡・相談ができた	95	3.65	0.58
		本日の授業全体の内容を理解することができた	95	3.65	0.63
10	キャンプ 準備	自分とは異なる国・地域の人々の考えや感情を理解し、共感しようとすることができた	110	3.61	0.61
		自分とは違う考え方であっても、他者の考えを尊重することができた	110	3.67	0.51
		人との関わりを楽しむことができた	110	3.65	0.58
		教職員やクラスメイトとの間で、必要な報告・連絡・相談ができた	110	3.61	0.59
		本日の授業全体の内容を理解することができた	110	3.65	0.58

表-8c 各回の授業内容、目標、回答者数、平均値および標準偏差

回	授業内容	目標 (Can-do/Can-enjoy リストより)	人数	平均値	標準偏差
11	学外 キャンプ	自分とは異なる国・地域の人の考えや感情を理解し、共感しようとする事ができた	120	3.73	0.51
		自分とは違う考え方であっても、他者の考えを尊重する事ができた	120	3.74	0.53
		人との関わりを楽しむ事ができた	120	3.80	0.53
		教職員やクラスメイトとの間で、必要な報告・連絡・相談ができた	120	3.75	0.55
		課題目標に向かってクラスメイトと協働し、自らの役割を見つけて活動する事ができた	120	3.75	0.54
		本日の授業全体の内容を理解する事ができた	120	3.78	0.51
12	文化鑑賞 創造実践 説明会	講義等を聴きながら、そのテーマやトピックを把握する事ができた	86	3.58	0.54
		好奇心を持って、ものごとを多面的に観察する事を楽しむ事ができた	86	3.60	0.56
		さまざまな活動に参加する前向きな気持ちを持つ事ができた	86	3.60	0.56
		興味が持てるものを探す努力をする事ができた	86	3.62	0.54
		本日の授業全体の内容を理解する事ができた	86	3.65	0.57
13	プレゼン テーション 1	課題についての適切な資料を探する事ができた	107	3.69	0.57
		自らの意見について、根拠(理由・具体例)を示して主張する事ができた	107	3.67	0.56
		正しい日本語で書いたり話したりする事ができた	107	3.64	0.57
		聞き手の助けになるようなPPTを作成する事ができた	107	3.61	0.61
		本日の授業全体の内容を理解する事ができた	107	3.72	0.51
14	プレゼン テーション 2	課題についての適切な資料を探する事ができた	101	3.66	0.55
		自らの意見について、根拠(理由・具体例)を示して主張する事ができた	101	3.68	0.53
		正しい日本語で書いたり話したりする事ができた	101	3.73	0.51
		聞き手の助けになるようなPPTを作成する事ができた	101	3.69	0.52
		本日の授業全体の内容を理解する事ができた	101	3.72	0.51

課題を提出した学生は、授業に出席し、課題に前向きに取り組む姿勢を持つために点数が高く出ている可能性はあるが、いずれの項目も4点満点で平均値は3点を超えており、全体的に見ると、学生は自身の達成度が高いと感じている。模擬店企画、学外キャンプ、プレゼンテーションといった活動系の授業は3.6以上の項目が多く、3.7以上の項目もある。

5. まとめ

本研究は、「楽しむ力」を可視化し、その測定可能性を検証することを目的としていた。調査1では、入学時から1年次後期にかけて「楽しむ力」の自己点検評価を測定し、その経時的変化を観察した。その結果、学生の自己評価は入学時から比較的高水準にあり、1年次前期の学修を経てさらに上昇し、その後も一定程度維持され

る傾向が確認された。また、1 年次前期終了時点の「楽しむ力」と学業成績 (GPA) との間に有意な相関が認められ、学修成果の一部が社会情動的スキルとしての自己認識に反映されている可能性が示唆された。ただし、本研究においては教員による評価基準への「楽しむ力」の反映度については明確でなかったため、今後精査する必要がある。

調査 2 では、「楽しむ力」と自己肯定感およびレジリエンスとの関連性を分析し、「楽しむ力」とそれぞれの既存概念との間に有意な正の相関が認められた。これにより、「楽しむ力」評価尺度は一定の基準関連妥当性を有することが示され、同尺度が社会情動的な能力を測定する指標として有効であることが示唆された。

さらに、調査 3 では、1 年次前期開講科目「基礎演習」における実践として、「大阪観光大学 Can-do/Can-enjoy リスト」を用いて設定された授業目標に対する事後の自己評価を分析した。その結果、いずれの授業回においても、学生の自己評価において高い達成感を有していることが明らかとなった。特に、模擬店企画、学外キャンプ、プレゼンテーションなどの能動的な活動に関する項目で高得点が示され、体験的・協働的な学びが「楽しむ力」の涵養に寄与している可能性が示唆された。

以上の知見から、「楽しむ力」は大学教育における学修の質を多面的に捉える上で有効な概念であり、従来の学力指標を補完する教育評価指標としての有用性が確認された。今後は、教員評価との整合性の検討、学年間を通じた縦断的追跡、ならびに教育実践への体系的フィードバックを通じて、「楽しむ力」を中核とする社会情動的スキル教育の実践的展開を推進することが課題である。

【倫理的配慮】

本研究の調査 1～3 においては、個人情報保護と研究結果の公表について対象者に調査票内に説明し、研究協力への同意を得られた場合のみ分析対象とした。また大阪観光大学人を対象とする研究倫理審査委員会の承認を得た (承認番号: 1)。

【謝辞】

調査 1・3 の実施にあたりご協力をいただいた「基礎演習」「調査研究 1」の科目担当の先生方に心より感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

大阪観光大学 (2022) 「大阪観光大学大学憲章 2022 10 の約束 教職員行動指針」 URL:

<https://www.tourism.ac.jp/shared/pdf/charter.pdf> (最終閲覧日 2025 年 11 月 6 日)

大阪観光大学. (2024) 「Q&A『楽しむ力』」 URL: [https://www.tourism.ac.jp/wp/wp-](https://www.tourism.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/01/e227478a8a8dd0f987c5dbd84b5b74d2.pdf)

[content/uploads/2025/01/e227478a8a8dd0f987c5dbd84b5b74d2.pdf](https://www.tourism.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/01/e227478a8a8dd0f987c5dbd84b5b74d2.pdf) (最終閲覧日 2025 年 11 月 6 日)

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—」『カウンセリング研究』第 35 巻、pp.57-65

佐久間留理子・坪根由香里・宮原道子・小森三恵 (印刷中) 「『大学教育における『楽しむ力』: 理念編』『大阪観光大学研究論集』第 26 号

築地典絵・藤原靖浩・折分量祐 (2021) 「自己肯定感を育むための 3 領域からのアプローチ 自己肯定感尺度の検討 (1)」『人間環境学研究』第 19 巻第 2 号、pp.141-147、DOI: 10.4189/shes.19.141

八田直紀・清水安夫 (2013) 「ポジティブ心理学の視点によるストレス・モデルの研究—ポジティブ・コーピング尺度の作成による検討—」『日本ストレスマネジメント学会第 12 回学術大会抄録集』、pp.35

八田直紀・清水安夫 (2014) 「青年期におけるレジリエンス要因の構造的に関する研究—大学生を対象とした簡易的レジリエンス測定尺度の開発による検討—」『学校メンタルヘルス』第 17 巻、pp.18-26、DOI: 10.24503/jasmh.17.1_18

八田直紀・清水安夫・大後栄治 (2014) 「スポーツ活動がライフスキルの獲得に与える影響性—大学生版ライフスキル尺度の開発による検討—」『体育研究』第 47 巻、pp.14-21、DOI: 10.51064/jkshs.47.0_14

山田良治 (2021) 『観光を科学する—観光学批判—』晃洋書房

OECD. (2024, July). *Social and emotional skills*. URL: <https://www.oecd.org/en/topics/social-and-emotional-skills.html> (最終閲覧日 2025 年 11 月 6 日)